

発 明 文 化 論

〈第 75 回〉

丸山 亮

屋敷林の保存

国立公園に代表される自然景観や古い町並みなどの都市景観を守る意義は話題になるが、人と自然とのかわりから生まれた田園風景を残すことには意識が行きにくい。

武蔵野線の車窓から外を眺めていると、広々した田や畑の中に、うっそうとした屋敷林に囲まれた構えの大きな民家を見ることがある。空っ風の吹き上げる砂塵を防ぎ、また家の構えを示すためにも、こうした林はずっと大切にされてきたのだろう。なんとなく心惹かれる風景だ。

明治の作家、国木田独歩は、人が大して気にもかけない風景に美を感じて「武蔵野」を著した。昭和の作家、大岡昇平も「武蔵野夫人」で、「はげ」と呼ばれる地の景観を、人間関係と同様、ていねいに描いている。

先日郷里の安曇野に帰省した折、この地で農業を営む友人の降旗政人氏から「安曇野の屋敷林」と題した本をもらった。降旗氏がかかわった「屋敷林と歴史的なまちなみプロジェクト」の活動報告で、安曇野の優れた景観をなす代表的な屋敷林を 50 近く写真入りで紹介している。櫟などの落葉樹、松や杉などの針葉樹の大木が庭園の一部ともなり、本棟造りの家を囲む。

雪を頂いた常念や燕岳、白馬岳などを背景に、木造白壁の家とそれを取り巻く高い樹木の屋敷林はどれも絵葉書になりそうな景色だ。安曇野は農業用水路が江戸時代から縦横に整備され、その川沿いや民家には樹木が植えられて、自然と人間の営みが特長のある景観を生み出してきた。土地によっては街道沿いに集落が古くから形成され、何軒かの屋敷林が連なっているところもある。

けれどもこうした景観は、戦後徐々に変わり始め、いま急速に変わろうとしている。まず昭和 50 年代の農業構造改善事業が、この地の風景に大きな影響を及ぼした。農業用水路はコンクリート製の U 字溝に変えられ、川沿いの樹木がすっかり切られしまった。短歌を詠んでいた私の母はその喪失感を歌に詠み込んでいる。農業用水の確保はこれで容易になり、田や畑の耕作面積が増えたものの、今日、米の生産調整で休耕地が広がっているのは皮肉なことだ。

さらにその後、大規模農道が新たに作られると、農業以上に近隣の都市を往復する働き手の通勤道路となり、沿道には住宅開発と商店の新規開店を誘った。この傾向は近年加速され、安曇野全体の景観に変貌をもたらしている。

屋敷林に囲まれた大きな家屋敷は、後継者がいないと都市部と同様、更地にされ、細分化した建売住宅に変わっていく。囲炉裏があった時代、屋敷林は燃料の木材を提供していたが、今日その必要がなくなると、樹木を保存する動機も薄れていく。

屋敷林を保存するためには、家屋との一体保全が理想だから、まずそれを目指すべきだろう。古民家がデイ・ケアの施設として生き延びているところもある。だが、歴史的な遺産で公共財ともいえる屋敷林の保存には、行政や地域の支援が必要で、保存に向けた条例や基金の実現を考える時期だ。

屋敷林の価値を認識する環境教育や啓発の活動も、進める必要がある。降旗氏は地域の歴史の語り部をつとめながら、その一端を担っている。まちなみプロジェクトの活動は報告書にとどまらず、どこからもアクセス可能なデータベースとするのが望ましい。そして、全国規模で活動の連携を図ってほしい。

かつて南方熊楠は、神社合祀に伴いその森が伐採されていくのを見て、体を張った抗議行動を展開した。神社という共同体の中心的な場所は、存亡の持つ意味がわかりやすい。けれども一見ありふれた屋敷林は個人の生活の場でもあり、保存に向かう努力を結集しにくい憾みがある。それだけに多くの英知が必要とされるのである。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)